山形県生涯学習センターだより

2021.3 Vol.21

生涯学習やまがた

旬の山形野菜とパスタのワンプレートランチ

「皆様のお越しをお待ちしております！」ILBLUスタッフ

調理作業の様子

グループでもお一人様でも利用しやすい店内

CONTENTS

❷ 特集
非日常の世界が創る新たなコミュニティ（笹井 宏益氏）

❺ あなた やまがた たからびと⑩
菊地 純さん（南陽市）

❻ 地域の取り組みを紹介します
大石田にぎりばっと部
置賜地区高校生まちづくりワークショップ

❼ コロナに負けない！事業報告／HPリニューアル
支え合いを広げる地域づくりフォーラムin村山
地域学交流集会

❽ Information
山形県生涯学習センター助成制度のご案内、第７回写真コンテスト入賞作品展、
遊学館ブックス最新刊好評発売中！

— 遊学館の新たな仲間たち —

ILBLU（イルブル）遊学館

複合施設である遊学館。昨年2月にリニューアルし、新たに加わった仲間をご紹介します。1階にオープンしたカフェレストラン「ILBLU（イルブル）遊学館」では、素材の個性を大切にした、四季の変化が豊かな山形ならではのイタリアンが楽しめます。コース料理や気軽に楽しめるパスタのワンプレートランチ、カレーランチ、そしてテイクアウトもできる充実したサービス。自家製パンも人気です。中庭を眺めながら、ゆっくりと楽しいランチタイムを過ごしてみてはいかがでしょうか。

ILBLU HP

ILBLU Instagram

特　集

芸術文化活動は、個人の活動の枠を超え、コミュニティの形成や地域づくりに繋がっています。今回は、芸術文化による地域づくりの事例等を踏まえ、地域における芸術文化活動の意義や魅力、その可能性について、笹井宏益氏より寄稿していただきました。

「非日常の世界が創る新たなコミュニティ」

玉川大学学術研究所教授　笹井（ささい）　宏益（ひろみ）　氏

1.地域づくりにおける芸術文化イベントの意義

「芸術文化による地域づくり」が言われてから久しい。高度経済成長期以降、私たちは、心の豊かさを求めて、鑑賞行動の機会や表現行動の場を拡充してきた。とりわけ、１９８０年代には、造形芸術、舞台芸術を問わず、全国各地に芸術文化施設が作られ、様々な鑑賞機会が提供された。また、公民館や文化センターなどでは、個人の趣味・嗜好や教養を深める講座が人気となり、市民に自己実現の場を提供した。

鑑賞行動にしても表現行動にしても、こうした活動において重要なことは、芸術文化活動は「一人ひとりの」生きていく上での感動や心地よさを実現するために行われているという点である。言いかえると、芸術文化活動に伴う美しさや感動あるいは達成感や充実感といった情緒・情感や価値意識は、つとめて個人に起因しかつ個人に帰属するものであり、そうした活動が、住民相互の関係性の総体である「コミュニティ」の充実・発展にとって意義をもつためには、別の条件（仕掛け）が必要となる。

すなわち、芸術文化活動は、鑑賞行動にしても表現行動にしても、人間の本源的な欲求に基づく活動であり、そこで創出された価値（文化的な価値）の多くは、言うなれば、「個人の（個人の自由な意思に基づいて）」、「個人による（個人の自由なやり方で）」「個人のための（個人の人生において意義がある）」ものであり、それがコミュニティ全体にとって意味をもつためには、そこでの情緒・情感や価値意識が、コミュニティのメンバー間で共有されることが求められる。しかしながら、個人の主観的な言動において創出された情緒・情感や価値意識に内在する価値を、他の人たちと共有することはそう簡単なことではない。これを進めていくためには、芸術文化を創出するプロセス全体の中で、そこから生まれてくる一人ひとりの情緒・情感や価値意識を逐次皆で共有していく、すなわち「共感」の経験を蓄積していくことが重要になる。ここで、いくつかの芸術文化イベントを例にとり、具体的に見ていくこととしたい。

2.芸術文化による地域づくりの例

(1) みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

まず、山形に縁のある芸術文化イベントのうち、造形芸術、音楽、舞台芸術、食、演技などの身体活動、レクチャーなど、多彩なジャンルの芸術文化（アート&カルチャー）が総合的に展開される芸術祭である「みちのおくの芸術祭山形ビエンナーレ」を見てみよう。

この芸術祭の最大の特徴は、作品・アーチストと学生・市民との相互交流を目的にした、大学（東北芸術工科大学）の大学開放事業として行われていることである。第１回目が２０１４年に開催された後、これまで2年に1度開催され、２０２０年もオンラインにて開催された。今回のテーマは「山のかたち、いのちの形」であり、命をとりまく全体性をテーマにしたプログラムになっている。これについて、芸術監督の稲葉俊郎氏は、次のように説明している。

> 自然界は常に変化のプロセスにいるからこそ、時にはわたしたちの心身も変化し、バランスは崩れる。心身と命のバランスを失いかけている時には、全体性を取り戻す場が必要だ。～中略～
> 2020年の新型コロナウイルス流行を契機に、社会は大きく変わる。もう元には戻れない。わたしたちはお互いの距離を大切にし、あらゆる生命との距離を大切にする社会へとシフトする。色々な転換が起きる。量よりも質を大切にする。浅いつながりよりも、深いつながりを求める。「いのち」の根元を見つめなおし、「いのち」と結びついた社会を求める。
> わたしたちは、「生命力」や「共感力」といった「力」を必要とし、そうした「力」を分け合い、共有する場を共に創り上げていく。～後略～

出典：山形ビエンナーレのHP（https://biennale.tuad.ac.jp/about/ 2021年2月12日）より抜粋。

これを読むと、この芸術祭が、これからのwithコロナやafterコロナ時代の姿を想定し、そこでの芸術文化の在りようや生活との関わりを問い直そうとしていることがよくわかる。山形ビエンナーレは、一見「鑑賞の機会」のみを提供しているようなイベントに見えるが、開催に至るプロセスや、このビエンナーレの開催中・開催後の社会的影響等も含めて見てみると、作品・アーチストと学生・市民との精神的・身体的な相互交流が、芸術祭固有の価値を形づくり、意義深いものとしていることがわかる。例えば、2020年のプログラムは、100以上のものから構成されているが、そのジャンルや出演するアーチストは多岐にわたっており、これらを見ると、地域を舞台にした作品展示や上演をとおして、アーチスト、学生、住民それぞれが対話したりコミュニケーションをとったりする機会や場を提供し、今回のコンセプトである「心身と命のバランスの全体性を取り戻す場をつくる」ことにつなげようとしていることがわかる。一つ例を挙げよう。上記は、ビエンナーレのプロジェクトの一つである、「いのちの学校」のプログラムの一部である。

出典：山形ビエンナーレのHPから2020年9月5日のプログラムの一部を抜粋。なお、「観天望希」とは、高野寛氏によるコンサートの名称。URL：https://biennale.tuad.ac.jp/project/inochi（2021年2月12日）

「いのちの学校」と銘打たれたこのプロジェクトは、前述のコンセプトのもとで、アート&カルチャーのミックスイベントとして企画されている。このうち9月5日のプログラムは、トーク、映像、音楽によって構成されており、これらをとおして、「生命力」や「共感力」といった情緒・情感や価値意識の共有を図ろうとしていることがうかがえる。

(2) 遠野物語ファンタジー

もう一つ、40年以上も続けられている市民手づくりの芸術祭を紹介しよう。岩手県遠野市において、毎年2月に開催される「遠野物語ファンタジー」である。

「遠野物語ファンタジー」は、1976年から現在まで、毎年一回上演されている市民劇である。この芸術祭の最大の特徴は、同市に伝わる昔話に題材をとり、原作から脚本、作詞、作曲すべてについて市民が創作し市民が演じていることである。2021年は『遠野猫譚（とおのねこばなし）』が上演される。

何を上演するかは、年ごとに行われる公募で決められ、それをもとに、脚本を作り、出演者を公募し、11月頃から練習が始まり、翌年2月に本番を迎える。バレエの踊り手は別にして、それ以外はすべて参加を希望する市民がそれぞれの役割を担っている。地元の中学・高校の吹奏部や合唱部、少年少女合唱隊、中学・高校合唱部も積極的に参加しており、地域の大人と子供との共同作業で制作される。このような市民による手づくりの創作プロセスこそが、この芸術祭が40年以上続いてきた原動力であり、その背景には、脚本、演出、音楽、俳優、踊り手、裏方スタッフなどを一手に引き受けてきた遠野市民の並々ならぬ努力がある。市役所や遠野市教育文化振興財団などの公的な機関が運営の中心になっているが、制作は、文字どおり市民の手づくりで、制作プロセスや公演をとおして、市民が皆で楽しむ芸術文化イベントとなっている。

左記の写真は、毎回上演の最後に、出演者総出で歌を歌う場面の写真であるが、これを見ると、子供から大人まで市民総ぐるみで創り上げているものが上演されることがうかがえる。

出典：遠野物語ファンタジー制作委員会

であることがよくわかる。

「遠野物語ファンタジー」は、市民劇の上演という一つの目標に向かって、多くの市民が、世代や職業、住んでいる地域などを超えて協力して制作活動を行うことで、原作や脚本、演出、演技、踊り、歌、演奏といった参加者の表現行動に対する「共感」を生み出すことに成功している。そうしたプロセスにおいてこそ、美しさや感動といった情緒・情感や価値意識が共有され、対話的なコミュニケーションのもとで、新しい価値規範や「生きる力」が生み出されていくのである。

3.社会教育における課題の共有

ところで、これまで社会教育の世界では、個人の生活上の課題を他者と共有することで「地域の課題」として位置付け、その解決を目指して学び合う（＝つながる・知識を得る・議論する・実践する）というプロセスが、活動として重視されてきた。そこでしばしば学習課題として掲げられるものは、もとをたどれば、住民が生活していく上で直面する問題である。この場合の学習活動（社会教育活動）は、こうした問題を科学的に再構成して「課題」として位置付け、仲間同士で共有し、その解決を目指して合理的な思考や議論にもとづき実践的な知見を積み重ねていく、という「共同学習の手法」により、自分や仲間を向上させ、ひいてはコミュニティ全体を改革していくものであった。ここでは、課題の抽出とその解決を目指した合理性を軸とするプロセスが、「地域づくりにおける学び」の中核を構成しているのである。

その一方で、こうした地域課題の解決のための「共同学習による地域づくり」では、美しさや面白さを感じたり、他者への信頼や地域への愛着を深化させたり、といった「共感」と密接な関係にある文化的価値が創出されにくいことも事実である。この点において、既に述べたように、共感にもとづく文化的価値の創出を求心力の中心とする「芸術文化による地域づくり」は、「共同学習による地域づくり」とは異なった魅力があると言える。

これに加えて、もう一つ、「芸術文化による地域づくり」の魅力についてふれておきたい。生活課題の多くは、人々の日常生活において生まれるものであり、それらの課題を解決するための学習活動は、日常生活の中に既に存在している様々な価値規範や人間関係などによる束縛などから、なかなか自由になることができない。そこでは、どうしても「知識に長けている専門家」や「経験の豊富な人」の発言力が大きくなるし、場合によっては、活動プロセスにおいて、住民の間で序列的な役割分担が生まれることもある。「共同学習による地域づくり」における学習課題は、多くの場合、既存の価値規範や人間関係を前提とするものであり、課題解決のプロセスをとおして、住民同士の間に「おたがいさまの関係」を構築したり、コミュニティの改革につながったりすることはあるものの、まったく新しい価値規範や「生きる力」を生み出す力には乏しい。この点、現代アートにせよ、伝統芸能にせよ、「芸術文化による地域づくり」の場合は、少なからぬ部分で非日常世界の体験と、そこでの世代や性別、職業、住んでいる地域などを超えた重層的な交流が組み込まれており、それゆえに、既存の価値規範や人間関係から比較的自由であり、対等な関係性が構築しやすいと言える。芸術文化活動は、人によってそれが好きか嫌いかの問題が生じることがあっても、正しいか正しくないかの問題が生じることはあまりない。それゆえに、芸術文化イベントは、参加者に「共感」を呼び起こすことが可能になるのである。

4.まとめ

以上の例を見てもわかるように、芸術文化イベントは、コミュニティに「共感」を生み出し、新しい価値規範や「生きる力」を創出する原動力になるものである。地域づくりを推進する最も根源的な力が人々の「信頼」と「地域への愛着」であるとすれば、「芸術文化による地域づくり」ほどそれにふさわしいものはない。

笹井　宏益 氏 プロフィール

1980年に文部省（当時）に入省し、生涯学習局地域学習活動推進室長などを経て、1995年、北海道大学助教授に就任。その後、国立教育政策研究所生涯学習政策研究部長などを経て、現在に至る。専門は、生涯学習論、芸術社会学。主な著書に『生涯学習のイノベーション』などがある。また、首都圏の様々な委員会の委員を務めている。

10

あなた
やまがた
たからびと

interview

菊地 純（きくち じゅん）さん

イラストレーター・
Be Here Now企画代表（南陽市）

県内で自ら学び続け、いきいきと活躍している方を「たからびと」として、インタビュー形式でご紹介します。今回は、イラストレーターとして活躍しながら、置賜地方を中心に地域を巻き込んだアート活動「ARTS SEED OKITAMA」を行っている菊地純さんにお話を伺います。

―始めたきっかけと現在の活動は？

東日本大震災の際にチャリティー目的で作家のグループ展を主催したのがきっかけです。展示は絵画、工芸、イラストやクラフトと様々。その後グループ展を置賜を中心に5年で10回行い、2016年からは「ARTS SEED OKITAMA―文化の種をまく。育てる。ひきつぐ―」（以下ASO）と題し、置賜地方全域に会場を広げた企画に発展。これまで4回行っています。この活動は、各作家の個展やグループ展を1つの地図にまとめ、点（個々の展示活動）を線（往来）に、そして面（地域）へと展開させる試みです。会期は毎年7月の一カ月間で、ギャラリーや飲食店、公共施設、地域の多目的スペースなど20から30会場で開催しています。そして、個人の広報ではなく、参加者全員でチラシ代わりにもなる一枚の地図を作って広報することで、その分、自分の作品制作に時間やお金を使える仕組みです。県外から参加の作家やお客様も増えてきました。置賜の7月はアートでいっぱいだと思ってもらうのが目標です。

―活動で気が付いた事は？

私は元々イラストやデザイン、企画コーディネートと、比較的幅広く仕事をしていましたが、加えてASOなどで様々なジャンル、素材を扱う作家さんと仕事をすることで、より多くのことを学んできたように思います。例えばジャンルや素材が違えば作品の扱い方、マーケット、仕事の仕方も様々。企画する度にこれまでの経験を頼りにするのではなく、毎回ゼロベースで考え、時にはこれまでのやり方を疑ってみる。自分の常識が他の人の常識とは限らない。そこには学ぶ面白さがあります。

それから、良い作品を作れる作家は地方にも沢山いるということ。しかしながら良いマーケットを持っているかは別だということです。地方に住んでいると皆知り合いで、例えば首都圏など地域の外に面白いことがあると思いがちですが、実際はその思い込みから身の回りが見えていないことも多いのではないかと思います。活動を始めて、作家同士はもちろん、展示でお世話になる会場の方やお客さんと、自然と交流が増えることで企画を超えた新しい展開が生まれています。置賜地方はアートや展示をする環境として良いとは言い難いのが現状です。しかしそこに暮らす作家としては、ただ生活する場というだけではなく、少しでも地域に良い影響、何かしらの還元をしたいと思うものではないでしょうか。すぐに何かが変わるということはありませんが、長いスパンで見渡した時、何かしら良い影響を残せたらと思っています。

自ら改装したアトリエでのグループ展の様子

―これからの目標は？

昨年は新型コロナウイルスの影響で5回目のASOが中止になりました。これからどのように文化活動を継続させるかが今後の大きなテーマです。コロナ禍以前の活動をただ再現するのではなく、むしろコロナ禍であることを前提とした、新しい局面に対応できるしなやかさを持って活動していきたいと思っています。コロナ禍では、アートの現場にも大きな影響が出ています。今も昔もアートのマーケットは主に都市圏にあり、地方で作家活動をすることはデメリットでした。しかしコロナ禍で、インターネット上のデジタルな、人との交流が主流となれば、場所と時間はあまり関係がなくなり、地方で創作することも都市圏で創作することも大きな違いはなくなるのかもしれません。むしろ、地方の広々としたアトリエや美味しい新鮮な食べ物の方がメリットとなるかもしれません。もちろんデジタルが全てを解決してくれるとは思っていません。作品は直接見たい、手で触れたい、作家にも会いたい、しかし今それが一番難しくなっている。それでも、だからこそアートを続けたい。文化をつなぎたいと思っています。

これまで開催した「ARTS SEED OKITAMA」の地図はこちらからご覧いただけます

地域の取り組みを紹介します

大石田町｜大石田にぎりばっと部

にぎりばっとを通したまちづくり

■　活動内容　■

野球部をモチーフに、大石田町の郷土料理「にぎりばっと」で食を通したまちづくりを行っています。にぎりばっととは、そばを使った郷土料理です。その昔、麺状のそばは殿様への献上品のため、庶民はそばを握り団子状にしたものを汁に入れ食べていました。食文化が豊かになるにつれ、食べられなくなり消えてしまいましたが、それを大石田にぎりばっと部が復活させました。活動を始めて9年目、県内のイベントや地元のお祭りに出展し大石田町のPRをしたり、地域団体や高校生と連携したそばの栽培イベント「大石田そばシリーズ」、にぎりばっとの由来の紙芝居の読み聞かせ、自主イベント「にぎフェス」を開催。まちおこしはもちろん、メンバーが楽しみ、互いを高めあえるようなサードプレイス（第3の居場所）になればと活動しています。

■　ここが大変　■

活動当初、メンバーに調理に携わる人もいなかったので、イベント出展に向けて調理方法等に苦労しましたが、地元のそば屋さんにも協力してもらい今のにぎりばっとにたどり着きました。また、一度消えた料理のため、地元の方になかなか認知してもらえませんでしたが、活動を続けていく中で認知してもらえるようになりました。

■　ここがうまくいった　■

にぎりばっとの販売だけでなく、そばの栽培や読み聞かせ、テーマソングにダンスなど、幅広い活動に発展する中で、さまざまな団体との連携や関わりが増え、大石田町に興味を持ってくれる方々が増えています。

活動者 voice

大石田にぎりばっと部は年齢や職業もバラバラのメンバーが特技や経験を寄せあって活動しています。部員同士やお客さんとの交流から気づきや学びがあり、本当の部活のようです。　（40代男性）

南陽市｜南陽市教育委員会「置賜地区高校生まちづくりワークショップ」

まちづくりは、つながりづくり

■　事業内容　■

市内在住・在学の有志の高校生29名が、南陽市の魅力や課題を探りながら企画を作るまちづくりワークショップに挑戦。まず1日目に講師の廣瀬隆人氏による地域づくりのレクチャーを受け、アイスブレイクで緊張をほぐし、2日目に班ごとにフィールドワークへ。商店街や生産者、公民館などを訪問し、地域の現状や住民の声を聞き取りました。そして3日目に「まちづくり企画書」を作成し、他班の意見も交えながら内容をブラッシュアップ。「朝市に出店」「農業をSNSで情報発信」「方言かるたの作成」等、高校生ならではの沢山の企画が生まれました。

参加者 voice

グループでの様々な言葉や考えを1つにするため、青年団などの方が手助けをしてくれました。実現可能な目標にするために、本当のチーム、仲間として話すことができ、自分以外の視点や、その後を考えることができました。
（参加高校生）

■　ここが大変　■

今回が初の開催。限られた時間でのレクチャーやフィールドワーク、そして企画書作り。全体的に時間が足りませんでした。また、高校生や関わってくれた青年達が全日程参加できるような日程調整の必要性を感じました。

■　ここがうまくいった　■

青年団や大学生などの「青年リーダー」が、ファシリテーター等として主体的に事業運営に関わったことで、高校生×青年層×地域につながりを持つことができました。人とのつながり、地域とのつながりを体験・体感することで、「次世代の地域づくりの担い手育成」に結びつけることができました。

コロナに負けない！ 事業報告

支え合いを広げる 地域づくりフォーラム in 村山

▶11月7日／遊学館&オンライン

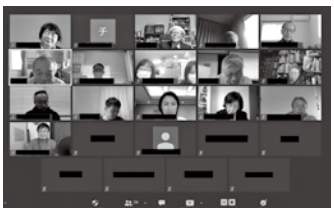
高齢者の生きがいづくりや生活支援活動の必要性等を学ぶ本フォーラムは、オンラインを併用して開催。当初、県外講師が来館できない場合のオンライン講演を想定していましたが、実際には講師は来館でき、会場で講演していただけることに！　ところが、オンライン受講の希望が予想以上に多く、遊学館会場の密緩和もあり、オンライン受講も可能としました。オンライン受講者は、遠方の方や会場まで足を運べない高齢者の方々、彼らを支える地元の行政職員さん等が多く、自宅や職場でZoom受講した他、地元の会場にスクリーンを設置し大勢で受講するケース等も。事前のオンライン受講者への練習会や資料送付、当日の講師映像のZoom配信用のセッティング等は少し大変でしたが、広い圏域を対象に事業展開する県や当センター等にとって、これから求められていく開催方法だと改めて感じました。

受講者Voice

Zoom参加でしたが、リアルタイムで質問に答えてもらい、一体感があったと思います。皆、悩んでいるのだと感じました。

地域学交流集会 “With / Afterコロナの地域学と地域づくり”

▶12月6日／オンライン



コロナ禍で多くの活動が停滞する中、状況に適応するだけでなく乗り越えるための視点の転換や行動の変容をもたらす新たな活動や学び、つながりに焦点をあて、グループワークも可能なZoomを用いてオンラインで開催。オンラインの研修会は長時間では疲れるため、午後のみのプログラムとし、前半に福岡県と兵庫県の先進事例のリレーインタビュー、後半はZoomのブレイクアウトルーム機能を使いグループ毎に参加者同士が意見交換や交流を進める実践交流ラウンドテーブルを行いました。会場開催と異なり、進行役が全体を見渡せず声がけもしにくいため、オンライン開催では意見交換等の進め方をよりわかりやすく伝える工夫や、意見交換等が進まないグループのフォローが重要になりますが、会場開催とほぼ同様のプログラムがオンラインでも開催できることがわかる貴重な機会となりました！

受講者Voice

- 他団体の活動や考え方、目標や姿勢などを直接聞くことができ、今後の自身の活動や運営にも取り入れられる箇所が多く、気づきの多い時間でした。
- 我が家にいながら各地の方々と交流できることに感動しました。

山形県生涯学習センターのホームページがリニューアルしました!!

以前のホームページよりも更に見やすく、県内の生涯学習情報も検索しやすいホームページにリニューアル。そして、講座で学びたい！　講師を探したい！　同じ活動をする仲間がいないかな？　そんな時は「やまがたマナビィnet」が活躍します。是非ご活用ください。

Renewal!

山形県生涯学習センター 遊学館HP
https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/

Information Space

山形県生涯学習センター助成制度のご案内

県内の皆様の多様な生涯学習活動を応援しています！
是非ご活用ください！

助成事業HP
https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/promotion/

助成事業	青少年地域学習活動支援事業	「山形学」地域連携講座支援事業	地域生涯学習支援事業
対象	高等学校向け	市町村･施設･団体等関係者向け	市町村･施設･団体等関係者向け
特徴	高校の課外活動として行われる地域学習や地域づくり活動を支援します!	地域学や地域づくり活動など地域に関する体系的な講座を支援します!	現代的課題の解決や社会の要請に応じた生涯学習事業を支援します!
募集数	7事業	10事業	10事業
募集期間※	4月1日～6月18日	4月1日～5月14日	
事業実施期間	2021年4月1日～2022年3月31日まで		
助成金額	助成の対象となる経費又は5万円のいずれか低い額	助成対象経費の3分の2（市町村･3年以上継続で助成を受けている団体は2分の1）又は20万円のいずれか低い額	
助成対象経費	謝金･旅費･賃借料･印刷製本費･消耗品費など		

※交付決定事業が募集予定に達しなかった場合は二次募集を行います。

洗心庵からのお知らせ

一般向け

第7回写真コンテスト入賞作品展

たくさんの応募作品の中から今年度の入賞作品22作品が決定しました。
下記日程で入賞作品展を開催します。

日　時　3月23日(火)～3月31日(水)
9:00～17:00
場　所　洗心庵

編集後記

今年度はまさにコロナウイルス一色の１年でした。人々が集い、学び合うための場と機会が失われた時期もあり、まだまだ以前のようには戻っていないのが現状です。取材と事業を通し、オンラインも活用しながら、どんな時でも学べる環境を整えていく重要性を感じました。そして、それによって生じる職員のより煩雑化する業務。併せて職員の技術を学ぶ場の必要性も感じました。(R)

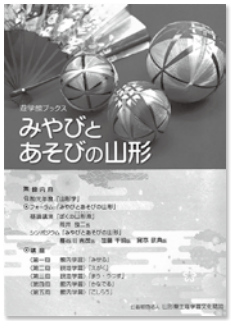
BOOK

一般向け

遊学館ブックス最新刊好評発売中!

『みやびとあそびの山形』

令和元年度「山形学」フォーラム・講座の記録集。山形で歴史的に育まれた文化とそれに触発され培われた優れた芸術文化。いかに現代の山形で生きる人々に彩りや潤いをあたえているかを探ります。



山形県生涯学習センター（遊学館３階）・文翔館・洗心庵、八文字屋、戸田書店山形店、宮脇書店天童店、宮脇書店清水屋店、こまつ書店、山形大学小白川キャンパス生協、Amazonで販売中。お近くの公立図書館でもご覧いただけます。

B6版／330頁
定価1,100円

▶バックナンバーはこちらからどうぞ！
https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/publication/

読者プレゼント

「生涯学習やまがた」をご覧いただいている皆さまに、感謝の気持ちを込めて、抽選で３名様へ遊学館ブックス最新刊『みやびとあそびの山形』(12月発売1,100円)をプレゼント！左記の山形県生涯学習センター広報紙担当あてに【①お名前・ご住所②入手場所③興味を持たれた記事④内容についてのご感想・ご意見・ご要望】を添えて、はがき・メール・FAXでご応募ください！締め切りは４月末です。

編集発行　(公財)山形県生涯学習文化財団　令和3年3月発行

山形県生涯学習センター　〒990-0041　山形市緑町 1-2-36[遊学館]
TEL 023-625-6411(貸館専用TEL 023-676-7182)　FAX 023-625-6415
E-mail yama@gakushubunka.jp
URL https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/
開館時間　9:00～21:00[夜間利用が無い場合は20:00まで]
休 館 日　第1･3･5月曜日、第3日曜日、年末年始

洗心庵[山形県生涯学習センター分館]　〒990-0041 山形市緑町 1-4-28
TEL 023-664-2800　FAX 023-664-2816
開館時間　9:00～21:00[夜間利用が無い場合は19:00まで]
休 館 日　毎週月曜日、毎月第3日曜日、年末年始